

複素関数練習問題 No. 3

桂田 祐史

2016 年 10 月 17 日

複素関数の実部・虚部, 正則性, Cauchy-Riemann の関係式

問題 48. 正則関数の定義を述べよ。

問題 49. z の関数として、 $\operatorname{Re} z, \operatorname{Im} z, |z|, \bar{z}$ は正則でないことを確かめよ。

問題 50. (複素指数関数を $e^{x+yi} = e^x (\cos y + i \sin y)$ で定義するとき) $f(z) = e^z$ ($z \in \mathbb{C}$) は正則で $f'(z) = e^z$ を満たすことを示せ。

問題 51. 複素関数の実部・虚部とは何か、説明せよ。

問題 52. Cauchy-Riemann 方程式とは何か、説明せよ。

問題 53. 以下の各 $f: \Omega \rightarrow \mathbb{C}$ に対して、 f の実部・虚部 u, v を求め、 u_x, u_y, v_x, v_y を計算せよ。

(a) $f(z) = z^3$ ($z \in \Omega := \mathbb{C}$) (b) $f(z) = \frac{1}{z^2 + 1}$ ($z \in \Omega := \mathbb{C} \setminus \{\pm i\}$) (c) $f(z) = \frac{1}{2}(e^{iz} + e^{-iz})$ ($z \in \Omega := \mathbb{C}$)
(ヒントにはならないが、(c) の $f(z)$ は実は $\cos z$ であることが後で分かり、結果もそれなりに重要である。)

問題 54. u, v がそれぞれ正則関数 f の実部・虚部であるとするとき、 u と v は偏微分可能で、 $u_x = v_y, u_y = -v_x$ を満たすことを示せ。

(出題の意図: 「 f が正則 $\Leftrightarrow u$ と v は微分可能で Cauchy-Riemann 方程式を満たす」という定理の証明は少し難しいが、この簡略版の定理くらいは自力で証明が書けた方がよい。)

問題 55. \mathbb{C} の開集合 Ω 上で定義された正則関数 $f: \Omega \rightarrow \mathbb{C}$ の実部 u と虚部 v が Laplace 方程式

$$u_{xx} + u_{yy} = 0, \quad v_{xx} + v_{yy} = 0$$

を満たすことを示せ。 u と v が C^2 級であることは認めてよい。

(後で一般に正則関数は冪級数展開出来ることを証明するので、その系として u と v は C^∞ 級であることが得られる。Laplace 方程式を満たす関数は調和関数 (harmonic function) と呼ばれるので、この命題は「正則関数の実部虚部は調和関数である」と書くことが出来る。常識とされる命題で、「証明せよ」は良く出題される。)

問題 56. Ω が \mathbb{C} の領域 (弧連結な開集合)、 $f: \Omega \rightarrow \mathbb{C}$ は正則とするとき、以下の (1)~(4) を証明せよ。

(1) Ω で $f' = 0$ が成り立つならば、 f は定数関数である。

(2) Ω で $|f|$ が定数関数ならば、 f そのものが定数関数である。

(3) Ω で f が実数値しか取らない ($(\forall z \in \Omega) f(z) \in \mathbb{R}$) ならば、 f は定数関数である。

(4) Ω で f が純虚数値しか取らない ($(\forall z \in \Omega) \frac{1}{i}f(z) \in \mathbb{R}$) ならば、 f は定数関数である。

(ヒント: すべて条件を f の実部・虚部 u, v を用いて表す。)

問題 57. $f(x) = \cos x + i \sin x$ ($x \in \mathbb{R}$) とするとき、 $f(0) = f(2\pi), (\forall x \in \mathbb{R}) f'(x) \neq 0$ が成り立つことを確かめよ。(これから複素数値関数では、平均値の定理は成り立たない。)

問題 58. Ω は \mathbb{R}^2 の領域とする。 C^1 級の $u: \Omega \rightarrow \mathbb{R}$ が与えられたとき、

$$u_x = v_y, \quad u_y = -v_x$$

を満たす連続関数 v は、もし存在するならば、定数差を除いて一意的に定まる (2つあれば、その差は定数という意味) ことを示せ。(以下はベクトル解析を学んでいる人向け) その場合に v を u を用いて表示する式を求めよ。

問題 59. u は \mathbb{R}^2 の開集合で定義された調和関数とする (u は C^2 級で $u_{xx} + u_{yy} = 0$ を満たす)。この u に対して、 $u_x = v_y, u_y = -v_x$ を満たす v が存在するとき、 v は u の共役調和関数であると言う。このとき、次の (1), (2) に答えよ。

(1) v は調和関数であることを示せ。 (2) u は v の共役調和関数であるかどうか答えよ。

問題 60. 正則関数 f の実部・虚部 u, v に対して、 $\mathbf{f}(x, y) := \begin{pmatrix} u(x, y) \\ v(x, y) \end{pmatrix}$ とおくと、次式が成り立つことを示せ。

$$\det \mathbf{f}'(x, y) = u_x(x, y)^2 + u_y(x, y)^2 = v_x(x, y)^2 + v_y(x, y)^2 = |f'(z)|^2$$

misc. (No. 1 の残り物)

有名な Hamilton による \mathbb{C} の定義の導入部分を自分の手で確かめてみよう。

問題 61. $K := \mathbb{R}^2 = \{(x, y) \mid x \in \mathbb{R}, y \in \mathbb{R}\}$ に

$$(a, b) + (c, d) = (a + c, b + d), \quad (a, b) \cdot (c, d) = (ac - bd, ad + bc)$$

で加法 $+$, 乗法 \cdot を定義したとき、可換体の公理

(i) $(\forall a, b, c \in K) \quad (a + b) + c = a + (b + c)$

(ii) $(\exists 0_K \in K) (\forall a \in K) \quad a + 0_K = 0_K + a = a$

(iii) $(\forall a \in K) (\exists a' \in K) \quad a + a' = a' + a = 0_K$

(iv) $(\forall a, b \in K) \quad a + b = b + a$

(v) $(\forall a, b, c \in K) \quad (a \cdot b) \cdot c = a \cdot (b \cdot c)$

(vi) $(\exists 1_K \in K) (\forall a \in K) \quad a \cdot 1_K = 1_K \cdot a = a$

(vii) $(\forall a \in K \setminus \{0_K\}) (\exists a'' \in K) \quad a \cdot a'' = a'' \cdot a = 1_K$

(viii) $(\forall a, b, c \in K) \quad (a + b) \cdot c = a \cdot c + b \cdot c, a \cdot (b + c) = a \cdot b + a \cdot c$

(ix) $(\forall a, b \in K) \quad a \cdot b = b \cdot a$

が成り立つことを確かめよ。

(注: \exists がついている、 $0_K, a', 1_K, a''$ は、一意的に定まる。それが何か具体的に書くと良い。可換体の公理に $0_K \neq 1_K$ も含める場合があるが、今の場合はこの条件も満足している。)

問題 62. 代数学の適当なテキストを探して、可換環とその極大イデアルの定義、実係数多項式環 $\mathbb{R}[x]$ を学び、

$$I = \{p(x) \in \mathbb{R}[x] \mid (\exists q(x) \in \mathbb{R}[x]) p(x) = (x^2 + 1)q(x)\} \quad (\text{要するに } x^2 + 1 \text{ の倍数の全体})$$

が $\mathbb{R}[x]$ の極大イデアルであることを示せ。(すると剰余環 $\mathbb{R}[x]/I$ は体になるが、これを \mathbb{C} の定義とすることが出来る。 — これは複素関数論からは離れるので、あくまで参考です。)

解答

解答 48. 複素平面 \mathbb{C} の開集合 Ω を定義域とする複素数値関数 $f: \Omega \rightarrow \mathbb{C}$ が、定義域の各点 z で微分可能とき、 f は正則であるという。 f が z で微分可能とは、極限

$$\lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(z+h) - f(z)}{h}$$

が存在することをいう。■

解答 49. (準備中)

解答 50. (準備中)

解答 51. $\Omega \subset \mathbb{C}$, $f: \Omega \rightarrow \mathbb{C}$ とするとき、

$$\begin{aligned}\tilde{\Omega} &:= \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x + iy \in \Omega\}, \\ u(x, y) &:= \operatorname{Re} f(x + iy) \quad ((x, y) \in \tilde{\Omega}), \\ v(x, y) &:= \operatorname{Im} f(x + iy) \quad ((x, y) \in \tilde{\Omega})\end{aligned}$$

で定まる関数 u, v をそれぞれ f の実部、虚部と呼ぶ。■

解答 52. 2つの実変数 (x, y) に関する2つの関数 $u = u(x, y)$, $v = v(x, y)$ に関する連立微分方程式

$$(1) \quad u_x = v_y, \quad u_y = -v_x$$

を Cauchy-Riemann 方程式と呼ぶ。任意の正則関数の実部・虚部 u, v は、この方程式を満たすことが知られている。■

解答 53.

(a)

$$f(x + iy) = (x + iy)^3 = x^3 + 3x^2 \cdot iy + 3x \cdot (iy)^2 + (iy)^3 = x^3 - 3xy^2 + i(3x^2y - y^3)$$

であるから、 $u(x, y) = x^3 - 3xy^2$, $v(x, y) = 3x^2y - y^3$.

(Mathematica では、ComplexExpand[(x+I y)^3] のようにすると分かりやすく計算してくれる。)

(b)

$$f(x + iy) = \frac{1}{(x + iy)^2 + 1} = \frac{1}{x^2 - y^2 + 1 + 2ixy} = \frac{x^2 - y^2 + 1 - 2ixy}{(x^2 - y^2 + 1)^2 + 4x^2y^2}$$

であるから

$$u(x, y) = \frac{x^2 - y^2 + 1}{(x^2 - y^2 + 1)^2 + 4x^2y^2}, \quad v(x, y) = \frac{-2xy}{(x^2 - y^2 + 1)^2 + 4x^2y^2}.$$

(c)

$$\begin{aligned}f(x + iy) &= \frac{1}{2} \left(e^{i(x+iy)} + e^{-i(x+iy)} \right) = \frac{1}{2} (e^{-y} e^{ix} + e^y e^{-ix}) \\ &= \frac{1}{2} (e^{-y} (\cos x + i \sin x) + e^y (\cos x - i \sin x)) \\ &= \cos x \frac{e^y + e^{-y}}{2} + i \sin x \frac{e^{-y} - e^y}{2} \\ &= \cos x \cosh y - i \sin x \sinh y. \blacksquare\end{aligned}$$

解答 54.

$$f'(c) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(c+h) - f(c)}{h} = \lim_{(h_x, h_y) \rightarrow (0,0)} \frac{(u(a+h_x, b+h_y) + iv(a+h_x, b+h_y)) - (u(a, b) + iv(a, b))}{h_x + ih_y}$$

特に $h_y = 0$ という条件を加えて極限を取ると、

$$\begin{aligned} f'(c) &= \lim_{h_x \rightarrow 0} \frac{(u(a+h_x, b) + iv(a+h_x, b)) - (u(a, b) + iv(a, b))}{h_x} \\ &= \lim_{h_x \rightarrow 0} \left(\frac{u(a+h_x, b) - u(a, b)}{h_x} + i \frac{v(a+h_x, b) - v(a, b)}{h_x} \right) = u_x(a, b) + iv_x(a, b). \end{aligned}$$

一方 $h_x = 0$ という条件を加えて極限を取ると、

$$\begin{aligned} f'(c) &= \lim_{h_y \rightarrow 0} \frac{(u(a, b+h_y) + iv(a, b+h_y)) - (u(a, b) + iv(a, b))}{ih_y} \\ &= \frac{1}{i} \lim_{h_y \rightarrow 0} \left(\frac{u(a, b+h_y) - u(a, b)}{h_y} + i \frac{v(a, b+h_y) - v(a, b)}{h_y} \right) = \frac{1}{i} (u_y(a, b) + iv_y(a, b)). \\ f'(c) &= u_x(a, b) + iv_x(a, b) = \frac{1}{i} (u_y(a, b) + iv_y(a, b)) \end{aligned}$$

から

$$u_x(a, b) = v_y(a, b), \quad u_y(a, b) = -v_x(a, b). \blacksquare$$

解答 55. C^2 級の関数の 2 階偏導関数は偏微分の順序によらないので、

$$\begin{aligned} u_{xx} + u_{yy} &= \frac{\partial}{\partial x} u_x + \frac{\partial}{\partial y} u_y = \frac{\partial}{\partial x} v_y + \frac{\partial}{\partial y} (-v_x) = \frac{\partial^2 v}{\partial x \partial y} - \frac{\partial^2 v}{\partial y \partial x} = 0, \\ v_{xx} + v_{yy} &= \frac{\partial}{\partial x} v_x + \frac{\partial}{\partial y} v_y = \frac{\partial}{\partial x} (-u_y) + \frac{\partial}{\partial y} u_x = -\frac{\partial^2 u}{\partial x \partial y} + \frac{\partial^2 u}{\partial y \partial x} = 0. \blacksquare \end{aligned}$$

解答 56. f の実部虚部を u, v とする。すなわち

$$\begin{aligned} \tilde{\Omega} &:= \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid x + iy \in \Omega\}, \\ u(x, y) &:= \operatorname{Re} f(x + iy) \quad ((x, y) \in \tilde{\Omega}), \\ v(x, y) &:= \operatorname{Im} f(x + iy) \quad ((x, y) \in \tilde{\Omega}). \end{aligned}$$

(1) 任意の $z \in \Omega$ に対して、 $z = x + iy$ ($x, y \in \mathbb{R}$) とすると、

$$0 = f'(z) = u_x(x, y) + iv_x(x, y) = \frac{1}{i} (u_y(x, y) + iv_y(x, y)).$$

これから

$$u_x(x, y) = u_y(x, y) = v_x(x, y) = v_y(x, y) = 0.$$

Ω は領域 (連結開集合) であるから、 u, v は $\tilde{\Omega}$ で定数に等しい。ゆえに $f = u + iv$ も Ω で定数に等しい。

(2) 仮定より $(\exists C \in \mathbb{R}) |f(z)| \equiv C$. もしも $C = 0$ ならば $f(z) \equiv 0$ であるから、 $f(z)$ そのものが定数である。以下 $C \neq 0$ とする。 $u(x, y)^2 + v(x, y)^2 = C^2$ を偏微分して $uu_x + vv_x = 0$ かつ $uu_y + vv_y = 0$.

$$\begin{pmatrix} u_x & v_x \\ u_y & v_y \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u \\ v \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}.$$

もしも行列式が 0 でないならば $u = v = 0, C = 0$ となり仮定に矛盾するので、

$$u_x v_y - v_x u_y = 0.$$

Cauchy-Riemann の関係式 $u_x = v_y, u_y = -v_x$ を用いると、

$$u_x v_y - v_x u_y = u_x u_x - (-u_y) u_y = (u_x)^2 + (u_y)^2, \quad u_x v_y - v_x u_y = v_y v_y - v_x (-v_x) = (v_x)^2 + (v_y)^2$$

であるから、

$$(u_x)^2 + (u_y)^2 \equiv 0, \quad (v_x)^2 + (v_y)^2 \equiv 0.$$

これから $u_x \equiv u_y \equiv v_x \equiv v_y \equiv 0$. 以下 (1) と同様にして、 f は定数関数である。

(別解) $2uu_x + 2vv_x = 0$, $2uu_y + 2vv_y = 0$ を導くのは上と同じ。そこから Cauchy-Riemann の方程式を使って

$$uu_x - vv_x = 0, \quad vu_x + uu_y = 0.$$

これは

$$\begin{pmatrix} u & -v \\ v & u \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u_x \\ u_y \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \end{pmatrix}$$

ということで、この連立 1 次方程式の係数行列の行列式は

$$u \cdot u - (-v) \cdot v = u^2 + v^2 = C^2.$$

$C = 0$ ならば $u = v = 0$ で、 $f = u + iv = 0$ も定数。 $C \neq 0$ ならば (逆行列をかけて) $u_x = u_y = 0$ で、再び Cauchy-Riemann の方程式を使うと $v_x = v_y = 0$ も導かれ、 u も v も定数である。ゆえに $f = u + iv$ も定数。— この答の方が見通しが良いような気がする

- (3) 仮定は $v \equiv 0$ ということであるから、 $v_x = v_y = 0$ in $\tilde{\Omega}$. Cauchy-Riemann の方程式 $u_x = v_y$, $u_y = -v_x$ から、 $u_x = u_y = 0$. ゆえに u は定数関数であり、 $f = u + iv = u$ も定数関数である。
- (4) 仮定は $u \equiv 0$ ということであるから、 $u_x = u_y = 0$ in $\tilde{\Omega}$. Cauchy-Riemann の方程式 $u_x = v_y$, $u_y = -v_x$ から、 $v_x = v_y = 0$. ゆえに v は定数関数であり、 $f = u + iv = iv$ も定数関数である。■

解答 57. $f(0) = \cos 0 + i \sin 0 = 1 + i \cdot 0 = 1$, $f(2\pi) = \cos 2\pi + i \sin 2\pi = 1 + i \cdot 0 = 1$ であるから、 $f(0) = f(2\pi)$. $f'(x) = -\sin x + i \cos x$ より、 $|f'(x)| = \sqrt{(-\sin x)^2 + \cos^2 x} = \sqrt{1} = 1 \neq 0$ であるから、 $f'(x) \neq 0$. ■

解答 58.

$$u_x = v_y = V_y, \quad u_y = -v_x = -V_x$$

を満たす連続関数 v, V があつたとすると、 $w := v - V$ は

$$w_x = v_x - V_x = (-u_y) - (-u_y) = 0, \quad w_y = v_y - V_y = u_x - u_x = 0$$

を満たす C^1 級関数である。ゆえに $(\exists C \in \mathbb{R}) (\forall (x, y) \in \Omega) w(x, y) = C$. ゆえに $v(x, y) = V(x, y) + C$ ($(x, y) \in \Omega$).

v は (v_x, v_y) というベクトル場のポテンシャルであるから、 Ω 内の任意の点 (a, b) を固定するとき、

$$v(x, y) = v(a, b) + \int_{C(x, y)} (v_x dx + v_y dy)$$

が成り立つ。ただし、 $C(x, y)$ は、 (a, b) を始点、 (x, y) を終点とする区分的に C^1 級の Ω 内の曲線である。条件 $u_x = v_y$, $u_y = -v_x$ により、

$$v(x, y) = v(a, b) + \int_{C(x, y)} (-u_y dx + u_x dy).$$

これが求める式である。(1) で見たように、もともと定数だけの不定さがあるので、 $v(a, b)$ は任意定数とすれば良い。すなわち

$$v(x, y) = C + \int_{C(x, y)} (-u_y dx + u_x dy). \blacksquare$$

解答 59.

(1) Laplacian の定義に $u_x = v_y, u_y = -v_x$ を代入すると

$$\Delta v = v_{xx} + v_{yy} = (v_x)_x + (v_y)_y = (-u_y)_x + (u_x)_y = -u_{yx} + u_{xy}.$$

u は C^2 級であるので、偏微分の順序交換が可能であるから、 $u_{yx} = u_{xy}$. ゆえに $\Delta v = 0$.

(2) u は v の共役調和関数ではない。実際 $U = v, V = u$ とおくと、

$$\begin{aligned} u \text{ が } v \text{ の共役調和関数} &\Leftrightarrow V \text{ が } U \text{ の共役調和関数} \\ &\Leftrightarrow U_x = V_y, \quad U_y = -V_x \\ &\Leftrightarrow v_x = u_y, \quad v_y = -u_x. \end{aligned}$$

これは v が u の調和関数である条件 $u_x = v_y, u_y = -v_x$ と似ているが違う。この条件が同時に成り立つとすると $u_x = v_y = -u_x, u_y = -v_x = -u_y$ より $u_x = u_y = 0, v_x = v_y = 0$ が得られるので、 u と v の両方が定数関数という特殊な場合しかない。もちろん定数でない共役調和関数の組が存在するので、「 v が u の共役調和関数 $\Rightarrow u$ が v の共役調和関数」は一般には成り立たない。■

解答 60. $f'(x, y) = \begin{pmatrix} u_x & u_y \\ v_x & v_y \end{pmatrix}$ であるから、 $\det f' = u_x v_y - u_y v_x$. u の偏導関数で表すと

$$\det f' = u_x u_x - u_y (-u_y) = u_x^2 + u_y^2.$$

v の偏導関数で表すと

$$\det f' = v_y v_y - (-v_x) v_x = v_x^2 + v_y^2.$$

$f'(z) = u_x(x, y) + iv_x(x, y)$ であるから、

$$\det f'(x, y) = u_x u_x - (-v_x) v_x = u_x^2 + v_x^2 = |f'|^2. \blacksquare$$

解答 61. (略解) 基本的に計算して確認するだけである。ヨのついているものは、何であるか書いておくと、

- $0_K = (0, 0)$.
- a' は $a = (x, y)$ のとき $a' = (-x, -y)$.
- $1_K = (1, 0)$.
- a'' は $a = (x, y)$ のとき $a'' = \left(\frac{x}{x^2 + y^2}, \frac{-y}{x^2 + y^2} \right)$. ■

解答 62. (準備中)